

牛は万物の尺度の古代印度 はるかな三千世界も牛車で

牛を大切にしているインドでは、古来、人馬一体ならぬ「人牛一体」の生活が営まれてきた。たとえば、古代インドでは、物の体積を表すのに「牛の足あと」といった単位があった。やわらかい土を牛が踏んだ時にできるくぼみの大きさ」と定義されているそうだが、よほど牛のことに通じていなければ見当もつかない。

また、西暦六二二年から六四五年までインドを旅行した中国の名僧玄奘の「大唐西遊記」には、インドの尺度のことも記されていて、それによると「大牛の鳴き声の極まる」ところといった「距離の単位」まであったことが紹介されている。

つまり、牛の鳴き声が届く限りの距離ということで、その距離を「俱盧舍」といい、これを基準にして

弓 肘(前肢の長さ) 指 麦 虱 蟻 隙塵 牛毛塵 羊毛塵 兔毛塵

など、順次「小さな長さ」がきめられていた。最後の羊毛塵、兔毛塵には別に細塵、極細塵の言葉が当てられていて

「極細塵は、また析つべからず、析てばすなわち空に帰す。ゆえに極微」とあり、これより小さなものはないというわけである。



「牛の鳴き声の届く距離」そのものが見当もつかないうえ、それと弓や麦、アリの大きさなどを同列に並べるのだから、われら「メートル法の頭」はくちやくちや。だの

に、昔のインド人の頭はさらに精密で、一クローシャ
 〓五〇〇弓、一弓〓四肘(中略)、一蟻〓七隙塵、一
 牛毛塵〓七羊毛塵、などこと細かに定義されているの
 だからもはやオカルトの世界。

一方、仏の住む世界は、「三千大千世界」といい、略して「三千世界」と呼ばれた。これにも中心となる「須弥山」を取り巻く「八山八海」以下、詳細な「内部構造」があった。その中で一つ最も重要な距離の単位として「由旬」というのがあった。由旬は漢語訳で、原語はヨジャーナ、つまり「牛車の一日の行程」を表す単位だが、およそ十五キロメートルぐらいのものだったのでは?とみられている。いふなれば三千世界にも牛車で行くといったイメージで、まさしく「牛は万物の尺度」がインド社会なのである。